美しくなつかしい、日本をのせて。

Cradle

［クレードル］出羽庄内地域文化情報誌

5

2011 May/June

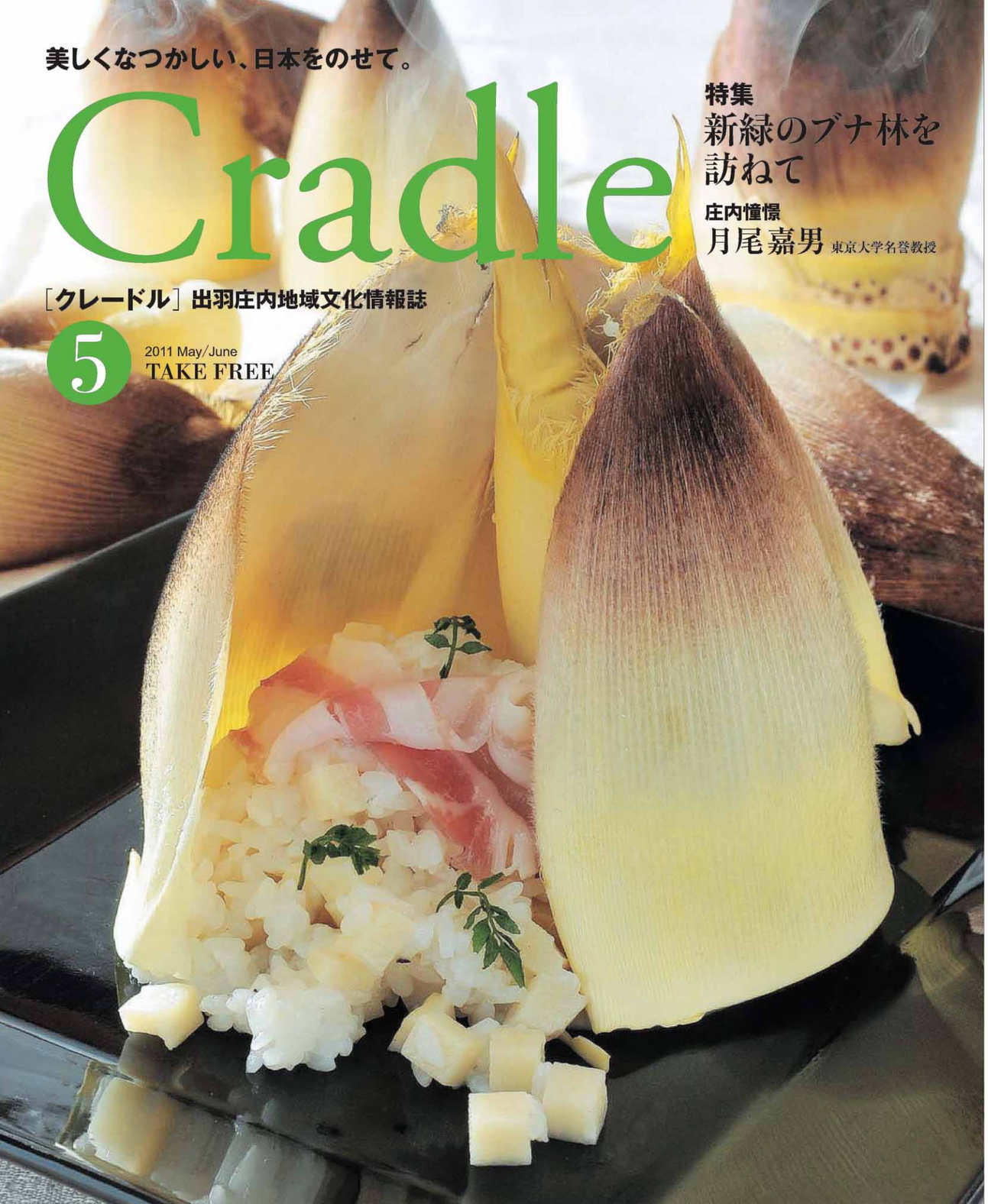
TAKE FREE

特集

新緑のブナ林を訪ねて

庄内憧憬

月尾嘉男 東京大学名誉教授



Cradle 5 美しくなつかしい、日本をのせて。［クレードル］出羽庄内地域文化情報誌

2011 May/June

平成23年5月1日発行（隔月奇数月発行）第1巻5号（通巻5号）

発行／Cradle事務局 山形県鶴岡市山王町8-15（株式会社 出羽庄内地域デザイン）電話0235（64）0888

制作／Cradle編集部 山形県酒田市亀田2-59-3［コマツ・コーポレーション］電話0234（41）0012

※食の都庄内の食材たちのページでも、湯田川孟宗を紹介しています。

山菜は5月28日までの受付となります。

採りたて新鮮！

OPEN 記念価格

天然山菜 おまかせセット

<例> あいこ、しどけ、うど、タラの芽、こしあぶら、こごみ（赤・青）等

3,000円set（税込）送料別

5,000円set（税込）送料別

※写真は5,000円セットイメージです。収穫時期により組み合わせが異なる場合がございます。

■庄内に数ヵ所ある特産地の中で、ごくわずかの流通量ですが、その柔らかさと風味で高い評価を得ている品です。

OPEN 記念価格

湯田川孟宗

数量限定50セット 1セット 約3kg 3,980円（税込）送料別

※写真はイメージですので本数やサイズは異なります。

5月末までオープン記念特価で販売中！

庄内の旬のおいしさをお届け致します。

Cradle Shop

ご購入のお客様先着100名様に

はらべこファーム フルーツソース プレゼント！

電話にて、お気軽にお問い合わせ下さい。

フリーアクセス（無料電話） 0800-800-0806

FAX 0235-64-0918

■つや姫の中でも特にお勧めなのは、厳しい栽培基準によって育てられた有機栽培米のつや姫です。

つや姫 TSUYAHIME

有機栽培 つや姫

精米2kg 1,700円（税込）送料別

精米5kg 3,700円（税込）送料別

玄米の2kg・5kgもあります。

■甘くてやわらかな食感がクセになります。

OPEN 記念価格

ジャンボアスパラ

10本束 1,980円（税込）送料別

株式会社 出羽庄内地域デザイン

〒997-0028 山形県鶴岡市山王町8-15

庄内クレードル 検索

http://www.cradle-ds.jp

ホームページからもお買い求め出来るようになりました！

多様が凝縮する庄内への期待

月尾嘉男＝文

庄内地域の魅力は、近代日本が喪失した多様という資産を現在にまで維持してきたことである。

国破山河在
城春草木深
感時花濺涙
恨別鳥驚心

唐代の詩人杜甫が戦乱で荒廃した国都長安を悲嘆して詠唱した有名な五言律詩「春望」の前半であるが、今回の東日本大震災で被災された人々の心奥に去来するであろう内容である。

今回の災害は偶然にしても、日本は政治も経済も技術も停滞し、今後を不安とする国民は多数である。ほんの30年前には、経済でも技術でもアメリカを畏懼させるほどの大国であった日本が、ここまで低落した原因は様々であるが、一言で表現すれば、時代の巨大な潮流の変化を見抜けなかったことである。

明治維新以来、日本は一律の教育、同一の言葉、統一の政府などが代表するように、全国を画一にする政策で国家を構築してきた。これは同一製品を大量生産する工業社会には最適であり、日本は百年程度の短期で世界有数の工業国家として成功したが、その頂点の時期に世界は情報社会に転換しはじめていた。

類似の小説や音楽に価値がないように、情報の最大の価値は相違にあり、その相違する情報が主役の社会は結果として多様になる。ところが画一社会に適合しすぎたため、日本は多様社会への転換に出遅れてしまった。急速に多様社会への転換が必要であるが、その源泉は地域の多様な資産に存在している。

機会があって出羽修験を体験するようになって約25年になるが、以来、庄内地方という特異な地域に魅入られている。海岸から山岳までの自然、芸能から方言までの伝統、温泉から料理までの文化など、近代日本で発展した都市地域が喪失した多様という資産を、現在にまで維持してきた地域の魅力である。

その自然の資産を象徴するのが原生のブナの森林である。戦後の資材不足に対処するため、日本全国の広葉樹林は植林によって針葉樹林に変貌した。これは工業社会に対応する画一の自然を象徴している。しかし、ブナが代表する広葉樹林の内部は人工の森林とは対極の多様な植物と動物の住処である。

さらなるブナの特徴は落葉である。晩秋に紅葉し落葉するのは翌春の芽生えへの準備である。日本の現状は落葉の時期であるが、これは次期の新緑への準備と理解すれば心配は無用である。明治維新以来、ある意味では不遇であった庄内地方が多様を武器に、日本の春望の先頭になることを期待したい。

写真提供＝出羽修験塾

第5回自然塾全国大会（出羽三山にて開催）で〝火渡り〟修業に挑む月尾氏

つきお・よしお　愛知県生まれ。東京大学名誉教授、工学博士。名古屋大学工学部教授、東京大学工学部教授、総務省総務審議官などを歴任。メディア政策、システム工学など研究領域は多岐に渡り、著書多数。情報通信を活用した地域づくりを提唱し、地方自治体の評議員や全国各地で私塾の塾長を務めるなど幅広い分野で活躍。南米大陸南端のケープホーンをカヤックで探検するなど冒険家としての活動歴もあり、地球環境問題にも造詣が深い。

訪ねてブナ林を新緑の

ブリリアントグリーンの
やわらかな新緑が芽吹くこの季節。
山形県は国内でも有数の
広大なブナの美林と出会える地。
庄内地域にも朝日連峰や出羽丘陵、
鳥海山麓、高館山などに
ブナ林を有し、日ごと緑は増して
美しいグラデーションを描き出します。
初々しくもたくましい若葉が茂り
鮮烈な生命の息吹を感じる森へ
爽やかな風とともに、
出かけてみませんか。

トビラ写真＝友田威

Special Edition

ブナ林は豊かな自然のシンボル

平野の田んぼに水が張って
輝く頃、山では残雪の白さと
若々しいブナの新緑が陽に包まれ、
新たな命の営みを告げています。
ブナの芽吹きの美しさに魅了され、
ここ庄内の森をフィールドに
研究をしている小山浩正さんに、
ブナと森についてお聞きしました。

千葉県出身の小山さんが初めて
ブナをみたのは北海道の山奥。雪道を
数時間かけてたどり着いた芽吹きのブナ林の
美しさにノックアウトされたそう。

Special Edition
新緑のブナ林を訪ねて

小山浩正さん
山形大学農学部教授

Koyama Hiromasa

昭和40年、千葉県生まれ。昭和63年、北海道大学農学部林学科卒業。その後、同大学農学博士号取得。11年間の北海道立林業試験場勤務を経て、平成14年に山形大学農学部生物環境学科助教授に就任。森林再生や環境保全を目的に、ブナなどの広葉樹の生態を研究。鶴岡市が主宰する「森の時間」にも企画者として参画。

冬にかけて葉を散らし、春になると芽を出す落葉広葉樹は、四季のはっきりした日本に広く分布する樹木です。特に雪に強いブナは、秋田、山形、新潟など日本海側に多く、なかでも山形県はブナ面積率がトップ。庄内平野もはるか昔は、全域がブナ林だったといわれています。

ブナの森は落ち葉が肥沃な土をつくるため、多種多様な生き物が生息します。山里に暮らす人たちは、めぐりゆく山の四季に合わせ、山と共存しながら生きてきました。9年前に北海道から移住して以来、庄内のブナ林を調査している小山浩正さんは話します。「木で無し、つまり『橅』と書くブナは、戦後、木材に使えないという理由から全国的に伐採され、人里に近いブナ林はほとんど杉林に代わりました。この辺りでも『ブナ退治に行く』という言葉が日常的に使われていたそうです。すごい言葉ですよね」。

今、庄内には、朝日連峰や鳥海山麓中腹に広大なブナ林が残されています。一方で、標高の高いところだけでなく、高館山といった低いところにも存在します。

「これは全国的に珍しいことなんですよ。

ブナ林は、世界遺産となった白神山地が有名ですが、面積率でいえば山形県が日本一。ブナとたくさん出会える庄内で研究に励みたくて、北海道から移り住みました。

もうひとつ庄内に来て驚いたのは、山奥の森でブナのあがりこを発見したこと。こんなところにまで人の手が入っているのかと。それだけでなく森全体が北海道と比べて何となく人の気配がしたんです。人の関わり方によって森の様相が変わることを肌で感じた瞬間でした」。「あがりこ」とは、薪材として伐られた木から芽が出て、それが成長してまた伐られたりするうちに独特な形に成長した木のこと

多様性を包容する ブナの森のやさしさ

斎藤政広さん
自然写真家

森に入ることは私にとって、道草のようなものです。目的もなく出かけても常に未知の発見と出会いが待っていて、必ずその期待に応えてくれるからです。

かつて私にとって「森」は、高みに向かう通過点に過ぎませんでした。しかし酒田へ来て、鳥海山と出会い、森がよく見えるようになりました。その入り口となったのがブナの森です。

鳥海山には冬になると湿った雪が大量に降ります。雪に洗われたブナの樹肌は白く美しく、白樺と見紛う人もいるほどです。また、その山裾を濡らす日本海と季節風の影響を強く受けていて、通常見られる針葉樹林帯を欠いてブナ林が森林の上限に達することや、雪が消えると花を咲かせる雪田植物群落が見られるのは、鳥海山の特徴です。こうした風景に私は、日本らしい森の美しさや生き物の多様さを強く感じています。

森の中をただゆっくりと歩いて時々立ち止まり、遠く近くの風景を眺めてみると、ブナが芽吹く中にモリアオガエルやエゾゼミ、ノウサギやカモシカなどの森の構成員がいて、そこは出会いであふれています。私にとって森は、つながりを感じさせてくれる場所です。そこにいる生き物はさまざまな関わりの中で生きていて、森に入ると自分もその関わりに入れるような気がして、つながっていることの実感と大きな安心感に包まれるのです。ブナの声に誘われて、森のやさしさのもとで、これからも自然の本質を見つめ続けていきたいと思っています。

私にとって、森に入ることは道草みたいなもの。目的がなくても、未知の出会いが常に待っていて、いつでもその期待に応えてくれます。

Saito Masahiro

酒田市在住。ブナの森をテーマに撮影活動を続け、1992年から10年間、写真展「ブナの声」を各所で開催。2001年より同名の写真冊子を刊行。最新刊が4月に刊行されたばかり。

新緑のブナの森に包まれた鶴間池
（鳥海山）

この時期、この地に滞在できる日々は幸せだ。雪深い鳥海山のブナの森ならではの繊細な風景が広がる。やわらかな光が森を優しく包んでいるようだ。木漏れ日の下ではどんな風景が展開していることだろう。
写真＝斎藤政広

小さくても風格あるブナの発芽（鳥海山）

しっとりと濡れた枯葉を押し分けるようにして、ブナが芽を伸ばしていた。その根元に殻斗があり、周りをよく見てみると、白いキノコ「シロヒナノチャワンダケ」が生えている。　写真＝斎藤政広

密生して生まれ出たブナの一年生たち（鳥海山）

ブナの枯葉の中、木の根元の近く、リスやネズミが冬の食料として集めたブナの実。生きるに足る分は確保したのか、それとも単に忘れたのか、集められたブナの実が仲良く発芽した。　写真＝斎藤政広

Special Edition 新緑のブナ林を訪ねて

です。小山さんはこれを〝ブナと人と雪が作る造形〟と言います。「でも人が森と関わりをもたなくなった今、山奥の森は元の姿に戻ってきています。それはそれでいいのですが、反対に人と森との関係を取り戻す必要があるのが、里山です」。

里山とは、暮らしのために利用してきた近場の山のこと。ブナを伐って植林した里山の杉林が、その後、生活に要らなくなって放置された結果、さまざまな弊害をもたらしました。野生動物の出現もそのひとつ。「野生動物が下りてくる一番の要因は、人の気配を失った里山が、ここから先は人間の場所だよと知らせるストッパー機能を失ったためです。近年問題のナラ枯れ拡大も、適切な時期に伐採するという人の営みが消えたから。すべて人が関わらなくなったからです」。

こうしたことを背景に今、全国各地で里山再生プロジェクトが進められています。かつて不要といわれたブナ林は豊かな森のシンボルとなり、里山に植林する動きも活発になってきました。小山さんの研究は、ブナの植林を実現させるためにその特殊な生態を研究して、豊作予測を出すこと。種がならない年が続いても準備が進められるよう、種の保存方法も開発しました。庄内の森を市民と散策する鶴岡市主催の「森の時間」では、森に対する正しい知識を歩きながら学ぶサイエンスツーリズムを続けています。「世の中にはまだまだ自然に手を出してはいけないという偏見が根強くありますからね。人間が森とどう関わるべきか、より多くの人に知ってもらうため、森の案内人養成を目的とした『森のソムリエ』講座も進めています」。他にも小山さんは、ブナの実を使った商品開発や、里山の柴を有効活用した「森育ち牛」など、里山活用術も練りながら、現代版・森との共生方法を、さまざまに思案中です。

薫風さわやかなこの季節、皆さんも新緑輝くブナの森に踏み出して、森と人との新しい暮らし方を考えてみませんか。

森は、必ずしも人が手を出していけないものではなく、正しい知識で関わりながら共存していくものであることを、実際に森の中を歩きながら、多くの人に伝えていきたいです。

Column 1

イヌワシの舞い飛ぶ大空の下で

空を見上げて森の姿を眺めてみる。

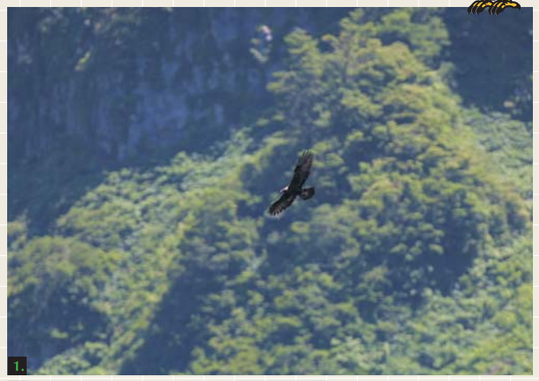
日本の森林に野生する生き物の、食物連鎖のトップに立つワシタカ類。絶滅の危機の中、たくましく鳥海の森の生態系を守っています。

庄内で確認されている猛禽類（もうきん）26種の中でも「イヌワシ」は酒田市の鳥に定められている地域のシンボル。現在全国には推定で650羽が生息、鳥海山には2つがい（ペア）が確認されています。

イヌワシは、大きな翼と尖った嘴（くちばし）、鋭い爪と頑丈な足、人間の約8倍の視力を持ち、その身体能力をいかしてノウサギやヘビ、ヤマドリなどを捕まえて食料にしています。「イヌワシのような食物連鎖のトップがいるということは、エサとなる動物が多いということ、生態系が豊かだということです。生態系の中ではどの生き物にもそれぞれに役割があって、ひとつの種が消えるだけで全体のバランスが崩れてしまいます。そこで、全国で種を保護する取り組みを行っています」。自然保護官の大木庸子さんが常駐する「鳥海イヌワシみらい館」は、環境省が全国8ヵ所に設置している野生生物保護施設のひとつで、絶滅の恐れのあるワシタカ類を対象としています。

昔、日本にはオオカミがいましたが、狩猟などが原因で絶滅し、オオカミが食べていたシカなどが増えたことによる農作物被害の影響が起こっています。今、イヌワシも個体数が減り、繁殖率も危機的に低下。それは人為的な要因がほとんどで、中でも大きな問題が、イヌワシが暮らせる自然の喪失です。「杉などの人工林は木が混み合っているので、イヌワシは空からエサを捕ることができません。人の手入れがないと林の中に陽が当たらず、エサとなる動物も減ってしまいます。最近は外材の使用が増えて、多くの林が放置されている状況です。人の手が入らず荒れてしまった林では生き物も暮らすことができません。イヌワシは強靭な狩りをする反面、とてもデリケートな生き物です。人が森を守り、イヌワシに関心を持って見守ってくれる人が増えるようにと思っています」。

鳥海イヌワシみらい館キャラクター「ワッシーくん」



1.

2.

1.イヌワシはその視力で遠い地上にいる人の存在も捉えます。人が繁殖期に巣のある付近に近寄ると、警戒して卵やヒナを放棄し、子育てをやめてしまうほど繊細な鳥です。　2.観察会はその雄姿を見られるチャンス。鳥海イヌワシみらい館では自然遊びなどのイベントを通して、イヌワシが暮らせる自然についての普及啓発活動を行っています。

環境省 猛禽類保護センター

鳥海イヌワシみらい館

鳥海国定公園内にある野生生物保護施設。イヌワシやクマタカなど猛禽類の調査、保護増殖活動、その生態が分かる展示や多彩なイベントを実施しています。

開 9:00〜16:30　料 入館無料

休 [4〜11月] 無休、[1〜2月] 火・土・日祝、[12、3月] 火曜、年末年始

所 酒田市草津字湯の台71-1

電 0234-64-4681

http://www.raptor-c.com/

人の暮らしの原点がある恵み多きブナ林

山里の生活文化はまるで
古代縄文の面影を残すかのようである。
山仕事はじつに多様で
一人何役もこなさなくてはならず、
それら森の恵みは山の神様からの
授かりものとして、感謝を捧げて利用する。
人はそうして常に自然と対峙し、
敬い、畏れながら暮らしを営んできた。

Special Editorial 新緑のブナ林を訪ねて

太田 威さん
写真家

Ota Takeshi

鶴岡市大山在住。1943年、中国東北部（旧満州）に生まれる。県立鶴岡工業高等学校卒業。74年に写真家として独立。近年は、里山の自然の遷移や、環境保全などメッセージ性の高い表現活動を続ける。「尾浦の自然を守る会」会長。著書『ブナ林に生きる―山人の四季』（平凡社）では、庄内地域の山里の生活を詳細に追っている。

私の住む大山の高館山には、素晴らしいブナ林が今も残っている。ここは私にとって幼き頃の遊び場だった。小学校から帰ると家にカバンを放り出し、林に行って野鳥や草花、小さな生き物を探し求め、生態観察に熱中した。そして今日にいたるまで全国のブナ林を隈なく歩き、あらためてその生物多様性に驚いている。

ブナ林は四季とともに千変万化して、美しく豊かに我々を癒し、山の恵みを与えてくれる。鳥海山や月山、朝日連峰などに散在する山里の集落では、その恵みをいかした半自給自足の生活風景が今も見られる。輝く新緑の森では、南からやってきたキビタキやオオルリなどがさえずり、いつしか野鳥たちのコーラスに包まれ、四季の始まりに躍動する。ではここに、古来の山仕事を列記してみよう。

山形県は平野から山里までがすっぽりとブナ林帯に入る「ブナ帯文化圏」である。人間の生活の原点ともいえる山人の四季の暮らしと彼らの生活の技術と文化は、この文明社会に役立つ何かを教えてくれるのではないだろうか。

春

❶ ウサギや熊を狩り、肉を食用にして動物たんぱく源を摂る。

❷ 山菜を採り、自家用や販売用にしたり、塩蔵して冬の保存食にする。

❸ 奥地の森に小屋をかけ、約1カ月、寝泊りしてゼンマイを採った。

❹ トチの木の花が咲いたら、トチ蜜を採る。

❺ 森の中を素掘りした天保堰（鶴岡市槎（たのきだい）代）から、田んぼに水を流す。

夏

❶ シナの木の原木を男たちが伐採し、皮を剥いでシナ布の材料にする。

❷ 温海カブの畑では、草木を乾燥させて燃やし、種をまく（焼畑）。

❸ キハダの木を伐採し、皮を剥いで胃腸薬や染料にする。

❹ マムシやシマヘビ、アオダイショウなどを捕まえて薫製にし、滋養強壮に用いる。

❺ 谷川でイワナやサクラマスをヤスで突いて、食膳を賑わす。

秋

❶ マイタケやナメコ、ナラタケなどのキノコを採る。

❷ クリやオニグルミ、チャボガヤ、マタタビ、蕎麦の実を収穫する。

❸ 山芋（自然薯）を掘る。

❹ トチの実を拾い、水や木灰を利用してアクを抜き、トチ餅を作る。

❺ ヤマブドウ酒やマタタビの虫えい酒を作る。

自然と人とがつくりあげた昔を語るブナの造形。

節くれだったこの奇怪な樹木の形は、ブナの「あがりこ」。昔、山の暮らしに炭焼きは欠かすことができず、枝を切り落として薪や炭にして生計を立てていた。その名残がこうして今も森の中に残っている。

写真＝太田威

四季のあるがままにブナ林と暮らす。

ブナ林の四季に合わせた山仕事に生きる山人たちは、皆たくましい。（中略）森の恵みは山の神様からもらったものとして、けっして粗末にすることなく、感謝の気持ちを込めて平等に利用してきた。『ブナ林に生きる―山人の四季』より　写真＝太田威

冬

❶ ヤマドリ猟をして、食料にする。
❷ ブナやミズナラを伐って炭を焼く。
❸ 紡いだシナ糸でシナ布を織る。
❹ アケビやヤマブドウのつるや皮で、農具やかごなどを編んで備える。
❺ サワグルミやヤマウルシなどで箕を編み、初市で売った。

山里の生活文化はじつに多様であり、山仕事は一人何役もこなさなくてはならない。山形県は平野から山里までがすっぽりとブナ林帯に入る「ブナ帯文化圏」である。人は森に分け入り、厳しくもやさしい自然と対峙しながら、山の神を拠りどころに生活を営んできた。この文明社会になり代わっても、ブナの森は変わらず我々に生活の場を提供してくれていることを、忘れてはならないように思う。

森の動植物や水、土、太陽と上手につきあいながら生活する、質素だがおおらかな自給自足の世界があり、私は感動した。

『ブナ林に生きる―山人の四季』より

Special Edition
新緑のブナ林を訪ねて

ブナの森に親しむ機会を創出したい

2 Column

森はぼくらの遊えんち♪ 親子で遊ぼう

森に住むたくさんの不思議や生きものに出会ってほしくて、奥山にあるブナの森や、気軽に歩ける里山のブナの森で、親子を対象とした環境教育プログラムを提供しています。

上山剛司さん
Ueyama Takeshi
あさひむら観光協会 インタープリター
環境教育工房 LinX主宰

昭和56年、鹿児島市生まれ。平成16年、酪農学園大学卒業、19年、山形大学大学院農学研究科修了。環境省対馬野生生物保護センター勤務を経て再び山形へ。現在は鶴岡市朝日地区を拠点に、環境教育活動を実施中。

1.昨年、朝日の大鳥で開催した「森の遊えんち♪」。吊り橋わたりに挑戦！　2.ブナの森に囲まれた中台池では、ハンモックでくつろいだり、絵本を読んだり、森カフェを楽しんだりと思い思いに過ごします。他にもLinXでは、子どもが自然と触れ合うための野生動物観察会や、保育・教育団体向けプログラムの提供など、さまざまな企画を実施中。

「ブナが広がる朝日連峰の森を舞台に、親子向け環境教育活動を行っている九州出身の上山剛司さんは、鶴岡市や林野庁など、たくさんの地元団体と協力しながら、精力的に活動しています。そのきっかけをお尋ねしました。「大学院生の時に、鶴岡のとあるブナの森で樹洞（木の穴）を調べていたら、地域の保育園の子どもたちに偶然出会ったので、森や動物のことを話したんです。すると保育士さんから『今日はたまたまこうして出会って森のことを教えてもらったけど、あなたたちが大学で研究していることはいつ教えてもらえるの？』と言われて、なるほどと。それからその保育園と、自然教育プログラムを始めました」。

昨年、上山さんが主宰する環境教育工房LinXは、「森のようちえん」を期間限定で行いました。森のようちえんとは、60年前にデンマークで始まり、近年日本各地に広まった自然の中で行う教育活動です。実際にドイツに行って、さまざまな運営形態の森のようちえんを見学し、また同年に開催したつるおか森の保育研究会主催の「森のようちえん　東北交流フォーラム」では、企画・運営を担当。東北一円から自然学校の職員や保育士、幼稚園教諭、親子など120人が集まりました。「僕が企画する『森のようちえん』は教育的要素を強め、子どもの自主性を尊重したプログラムを組んでいます。一方、あさひむら観光協会として開催している『森の遊えんち♪』はイベントなので、あまり約束ごとは作らずに、自然の中でゆったり過ごしてもらっています」。

庄内は奥山にも人里にもブナの森がある希少な地。子ども時代に身近な森で遊んで、大きくなったら奥山へ。そこには野生動物とのうれしい出会いもきっとあることでしょう。多くを森に覆われた地域だからこそ、森との親しみ方を、それぞれにみつけていきたいですね。

スパールの手練り香草石鹸

今や「環境と人にやさしい」を代名詞にした商品は
世の中のスタンダード。でも時代がこうなるずっと前から
環境のため、未来のためにと、生み出されてきたモノがある。
それが、スパールの、香草石鹸。

コロンとまあるいこの石鹸は、きめ細やかな泡立ちで肌に必要な菌を守りつつ、余計な汚れを洗い流してくれるから、サッパリしているのにつっぱらない。いくら使っても形が崩れないから経済的だし、泡が川に流れれば微生物が食べてくれる。

作り方はいたってシンプル。植物性の石鹸素地にハーブや白樺などの植物エキスをじっくり手で練りこみ、お餅を丸めるように1個ずつ形にして1ヶ月乾燥させる。機械で大量生産されるのが当たり前の世の中で、希少だ。だがこれで終わりではない。もともと有害な化学物質の影響を受けやすい妊婦と赤ちゃんのために開発されただけあって、植物原料は自社農園で無農薬栽培されている。

約5万平方mに及ぶ農園は、一度も農薬が撒かれていない土地だったところ。畑に撒く堆肥の原料は薬物汚染されていない食用鳩の糞で、その鳩は無農薬栽培された畑の作物を食べて育つ。穢れなき大地と植物、鳩の循環である。こうして徹底的に人間による有害物質を排除した農地は、さまざまな生き物が集まる肥沃な土となる。ここから生み出されるのが、スパールの石鹸や化粧品、食品などだ。所長の山澤さんは語る。「人間も虫も草も自然、人間の肌にいる微生物も自然。だから俺は自然界の生き物をできるだけ排除しないモノづくりをしているだけで、ハーブも化粧品も目的ではないな。未来の種を残すのが目的だな」。

目にみえない有害物質が日常に蔓延している現代。小さな畑の、大きな自然生態系から生まれた手練り石鹸は、私たち人間が地球上でどう生きるべきなのか、大切な示唆を投げかけている。

JR狩川駅近くにある「ハーブ研究所スパール」は所長の山澤清さんが昭和59年に開所。「循環型有機栽培」の理念のもと、化学薬品を一切使わない作物の生産・加工・販売を行っている。自然生態系の復活を目的とした研究も続け、現在は川シジミを養殖中。「虫も鳥も草も人間もみな同じ自然。なのに人間だけが自然の意に反したことをしている」と語る山澤さんのもとに集まる人は多い。

ハーブ研究所スパール　0234-56-3883
ご購入のお問い合わせはCradle Shopへ　0800-800-0806

庄内写真季行 3 牛渡川

水が自然の恵みであることを思い出させてくれる生きものたち。

つい近年まで、人は井戸や堰を掘って水を手に入れました。集落の周囲には水があり、陸との境―水辺や湿地にニホンアカガエルやゲンジボタルがいました。やがて上下水道や用水路が整備され、自然の水を利用していることを実感しにくくなり、水辺や湿地、そこに棲む生き物も減りました。湧水の周りの湿地に生き残る彼らは、水は自然の恵みだと思い出させてくれます。

写真・文＝
畠中裕之（遊佐町在住）